



中国がわかるシリーズ 23 貞観の治（上）

ライフネット生命株式会社
代表取締役会長兼 CEO、出口 治明

唐の高祖李淵は、隋の制度をほぼそのまま受け継ぎました。より正確に言えば、煬帝時代を否定し、開皇の治に戻ろうとしたのです（大業律令の廃止と開皇律令の復活）。隋と唐の関係は、始皇帝と劉邦の関係に極めて近いものがあります。厳格な農民支配が隋末の大反乱を引き起こしたとの反省から、郷里制は残したものの、郷正を廃止して、その運営は（里を束ねる）里正に任せて、農民の自治を尊重しました。なお、散村は村正が、都市の区画（坊）は坊正が（里正同様）統括するシステムになっていました。621 年、高祖は通貨改革を行い、それまでの五銖錢に代えて、開通元宝（開元通宝、と読むのは間違いである）を発行しました（開通元宝は、唐の 300 年、機軸通貨の地位を保つことになります）。624 年には、新律令（武徳律令）を發布し、均田制や租庸調を定めました。

高祖は長男、李建成を皇太子としていましたが、次男、李世民の能力、声望は群を抜いていました。建成の忠臣、魏徴（「人生意気に感ず」で有名）は、皇太子に世民を除くことを訴え続けましたが、皇太子の容れるところとはなりません。626 年、世民は、玄武門の変で、皇太子と実弟を殺害し、高祖を軟禁して自ら即位しました。世民こそが、後に、中国史上最高の名君の 1 人と謳われることになる唐の太宗（～649）です。太宗の前に曳き立てられた魏徴は、太宗を痛罵しました。以降、太宗は、魏徴を重く用いて、常にその諫言を聴くことになるのです。627 年、元号が貞観と改正されました。太宗は、房玄齡や杜如晦などの有能な家臣を用いて政務に励みました（貞観の治）。太宗と臣下の問答録は、後に「貞観政要」として纏められ、漢字文化圏における政治のバイブルとなりました（なお、私たちが現在目にしている「貞観政要」は、大元ウルスの時代に整理、校訂されたものです。クビライが愛読し、魏徴のような人材を広く求めたと言われています）。